ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学　所属：現代社会学部　名前：中島 由佳　作成日：2025 年 2 月 8 日

１．教育の責任

私たちの生活は直接の対面の中で，また SNS や仮想会議・動画等を通じて人と向き合い，共感したり葛藤しつつ，日常の生活の中で仕事の中で，社会の一員として生を営んでいく。

心理学の学修を通して，「自分とは何か，ひととは何か，対人関係とはなにか」について，生涯を通じて有用となる気づきと探求の心を育んでいくこと（Study for Life through Psychology）を心理学教員としての教育の責任とする。

２．教育の理念

自分を知るとともに，己の主観のみが解決法・認識の方法の全てではないことを心理学の学修を通じて学生が悟ることができるよう，学生の知識・思考力・洞察力を涵養することを教育理念としている。講義・演習を通して，「豊かな教養と専門劇学術，旺盛な自己開発精神，優れた国際感覚及び問題解決能力を備えた人材を育成する」との本学の教育目的を卒業時に果たし得るよう，それを生涯にわたり活用しうることを教育の目的としている。

３．教育の方法

(1-1) 教育の目的と目標―教員としての目標

〇知識や技術の伝達方法　楽しい授業を心がける。まず自分が楽しめるよう，楽しんでいることが伝わるよう，授業準備や授業リハーサルを徹底する。「自分の授業は全く楽しくなく誰も自分の授業など聞きたいなどと思っていない」と想定し（実際その通りなので），どうすれば学生が授業に興味を持つか，能動的に動こうとしない学生たちに作業をしてもらうためにはどのようなシステムを導入すべきか工夫をする。また，認知的不協和が起こると人はその先の理解が難しくなるため，授業予習の中で自分が説明しにくい部分は学生も理解しにくいと見做し，分かりやすい説明や例を挙げることを心がける。

〇学生との接し方　学生が大学４年間の間に，授業の受講のみならず様々な体験を通して「おのれを知る」こと，つまりはアイデンティティの確立を最終的な教育目標とする。自分は何が得意なのか，何が好きなのか，何ができるのか，どのような対人傾向を持つのか，危機や逆境に際して自分が犯しがちな失敗，自分という人間の強みと弱み（そしてそれは表裏一体であること），どのように生きていきたいのか，等を学術的・生活的・対人的試練を通して，学生が会得するための援助として講義・演習等の授業およびアドバイザー業務を行う。「援助」はアドバイザー業務として必要ではあるが，援助することが目的ではなく，学生がおのれに気づくこと，それを今後の人生に活かして行けるよう介入・見守りを行うことが使命であると考える。時として，介入よりも見守ることの方が重要な場合もあり，特に成長途上にあり伸びしろの多い大学生に対しては「自分で学び今後の人生に活かすこと」を会得できるよう，伴走・伴歩・傍らに存在することが学生に対する援助となると信じる。

〇自らの専門分野における教員としての成長や発展　常に新たな知見に触れるよう，研究を行う。研究作業を通して新たな論文や著書に触れ，また時世を反映したトピックを用いるよう心がける。

〇効率　効率は良くない。毎週授業後に数百枚の授業レポートを読み，共通した意見，相反する意見，他の学生に参考となるような意見を集約し，授業の最初に「前回の復習」として披露する。どの授業でも「前回の復習」を行うため，授業準備の効率は良いとは言えない。しかし，「前回の復習」は様々な意見・考えを持って良いことを学生に気付かせ，落ち込んだり悲観的考えを持つ学生に勇気を与える機会となるかもしれないため，続けている。

(1-2) 教育の目的と目標―学生に求めること、学生に対する期待

〇学生の専門能力の向上　客観的に物事を見ること，理解することを学んでほしい。心理学的知識・思考法を身に着けることにより，流言等に惑わされることなく科学的知識を基に正しい解を得ることに努めるようになってほしい。

〇学生の人間的成長　心理学の講義を通して，自分の性格や対人的な態度について科学的に学ぶ。縦の時間軸で心理の発達を学ぶことにより，ライフサイクルにおける大学生としての自分，社会・家庭人としての今後を展望する。他者の軸と自分の軸の違い（文化の相違）を学ぶ中で，共生するための方策を思索することができるようになる。

(2) 教育実践

大学名：大手前大学　所属：現代社会学部　名前：中島 由佳　作成日：2025 年 2 月 8 日

シラバス　各科目で設定した到達目標に沿ってシラバスを作成する。基本的に各回のシラバスを遵守し，時間配分に心を配ることにより，学生が安心して講義を受けられ信頼関係を醸成しうることを心掛けている。

教科書の選定、テキスト　基本的にテキストは用いない。テキストが必須である場合にのみ使用する。それ以外の授業では，学生の費用的負担を鑑み，テキストは用いない。また研究室に統計分析や研究の行い方，心理尺度に関する本をそろえ，学生が随時借りられるよう心がけている。

双方向的な学習　授業時間内に，その回で学んだ知識に基づいた「ワーク」を行い，その結果を課題レポートとして提出してもらう。提出された課題レポートは必ず目を通し，次回の授業の冒頭で学生からのコメントをいくつか披露し，質問に答える時間を設けることにより，前回授業の復習となるとともに，教員だけではなく他の学生がどのように感じ学んでいるかについてのフィードバックとなり，「他者の軸を知る」糧となっていると信じる。

課題・試験　課題レポートは授業で学んだことのまとめと授業で理解したことを記すよう求めている。中間・期末試験は，授業中に出題する箇所を予め公開する。それにより学生は，身を入れて学修すべき・覚えておくべきポイントを把握・心に留めることができ，生涯にわたって有用な知識を学生が身につけることができるよう留意している。

学習方法　各授業回に予習課題を課している。予習課題は，次回の授業に関連しており，次回の授業への動機づけとして用いている。また中間・期末試験の前の週にも試験問題への解答を作成することを予習課題として課しており，真剣に学修を振り返り，時間をかけてこれまでの学修成果を身に着けることができるよう留意している。

Web の利用　ゼミナールでは zoom を用い，各学生の状況に合った指導を心がけている。各授業では el-Campus を利用し，欠席した学生を含めての前回授業の資料ダウンロードや中間・期末課題や試験に関する告知を行っている。

講義スタイル　ライブ感を大切に，学生との対話を心掛けている。各授業回で反転授業の手法を取ることにより，学生の授業への興味と理解を深めるよう心がけている。

４．教育の成果

(1) 授業見学・授業アンケート等の内部評価

概ね，教員の熱意・授業の内容については平均以上の評価を学生より毎年得ている。また，「改善すべき点」についてのコメントを糧とし，教授法や授業内容を学期ごとに見直し・改善するようにしている。

(2) ゼミナール応募の学生よりの評価

定員の倍以上の学生が本ゼミナールを毎年志望するが，志望理由として授業内容を挙げる学生が多い（学生の申込書より）。またキャリアデザインⅣのプレゼンテーションでも，授業により，より深く心理学を学びたくなったと述べる学生が複数人いるのはありがたく感じる。

５．改善への努力と今後の目標

目標に対する自分の課題　授業準備に対する時間をかけすぎていると，やはり感じる。土日・昼休みなく授業準備を行っているが，その方法は持続可能性に乏しく，授業への士気に影響を及ぼすと感じている。また，現在のようなきめ細やかな気配りに基づいた授業方法が，真に学生の能力を涵養しうる方法であるか不明である。

課題の解決方法と計画　学生のためと思い，かなりの時間をかけて行っていること（例：全員の課題レポートに毎回目を通し，その中から学生に知ってほしいコメントをピックアップし，授業資料に含める／毎授業後のライブ配信授業の動画化／学生各人の心情に立った丁寧な指導）が真に効果的か，検証することを計画している。

今後の計画　過不足なく質を保って来季の授業を行い切ることを目標に，体調管理に留意する。また卒業研究に適当な指導を行い，学生が満足のできる卒業論文を提出できるよう，冬期休暇返上して査読・指導を行ったが，引き続き，プレゼンテーションまで指導にまい進する。

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学　所属：現代社会学部　名前：中島 由佳　作成日：2025 年 2 月 8 日

【添付資料】